

# ラオスの農業 (6)

藤原昇

## (二) 牧草及び飼料作物

ラオスでは、未だ畜産という形態が十分に確立されていないために、飼料作物、牧草の栽培という事は現在では考えられないのである。多くの粗飼料を必要とする水牛や黄牛でも全く自然放牧（朝早く外に出して夕方帰って来るという自由な飼育形態）を行なっているの、牛に粗飼料を栽培して給与するという事は彼等には未だ考えられず必要ないのである。

したがって乾季になると食べられる青草は殆ど消えてしまうので水牛や黄牛は、ひどい栄養失調の状態になるのである。

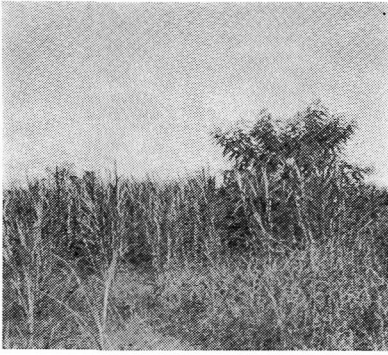
しかしラオスの畜産関係の試験研究機関では、(主として筆者の勤務したドンドック畜産試験場) かなりの牧草を栽培し検討している。

特にヴィエンチャン市の北東50キロにあるオーストラリア農場では目下牧草の研究を重点的に進めており、熱帯特有の牧草の育成について検討している。

筆者もドンドック畜試において、日本からの牧草及び飼料作物の育成試験を行なっ

て来たが、日本より輸入した飼料作物は余り好評とは言えず矢張り熱帯原産の特有の牧草類が圧倒的に良い成果を示した。

ラオスで見られる主な牧草類は、○コモングニア・グラス、○コロニアオ・ギニアグラス(二つともニューギニア原産) ○パッファロー・グラス、○モラス・グラス ○パラグラス ○ペンゴラ・グラス ○エレファント・グラス ○ナンディ・セタリア、等が多くみられるのである。これらの中で極めて強く成育の良いものは、ギニア・グラス パッファロー・グラス、パラグラスである。



バッファローグラス



ギニアグラス

特にパッファロー・グラス(別名ネピア

グラスという)は刈取後の成育(再生力)は抜群であり、年数回の刈取り可能で年間一万キロ(刈当り)の収量は確実で、株分け法で増殖出来るので実に良い永年牧草である。しかし家畜による嗜好性は若干劣るようである。一方パラグラスについてみると、この草はまず東南アジアの牧草の中で最も多くみられる草で実に繁殖力旺盛で、蹄傷に耐え、乾季においても決して枯死する事もなく越年し、雨季になると著しく増大し、家畜の嗜好性も抜群で収量も一万キロ近く上げる事が出来るのでパッファローグラスと共に良い永年牧草である。

ギニアグラス、これはニューギニア原産でパラグラスと共に優良な牧草であり、パラグラスと同程度の収量を示し、家畜の嗜好性も良く、繁殖力は最大である。これも雨季における成育が大なのでパラグラスと並んで放牧用に適する牧草である。この三種の牧草(永年牧草)が東南アジアに多

くみられる代表的なものである。

一方一年生牧草(飼料作物)としては、ソルゴー、テオシント、トウモロコシ、カウピー、マングビーン(東南アジアに多くみられる苜蓿科植物)―主体は人間の食用とするモヤンの原料である)等が栽培されている。日本からのクロバエ等の実験も試みたが、あまり良い成果は示されなくて、これらの苜蓿科牧草におさされてしまった感じである。日本からの牧草の導入に際しては、その栽培の時期を十分に検討することが是非必要なのである。常夏の国とはいえ、それぞれの植物に対する最適の成育時期はあるので、それを十分に検討してみる事が必要なのである。乾季に非常な成育ぶりを示す植物もあるので、それらの時期は単に気象条件のみならず、病虫害の発生時期、湿度等の問題からも十分に検討して行く必要がある。尚更に、今後ラオス(広くは東南アジア)における牧草、飼料作物の育成に關してはあらゆる角度から良く検討して、新しい品種を育成(育種)して行くという考え方も大いに必要であるように思われる。日本からの牧草導入によって更に良い牧草、彼の地に適するものを育てて行くという考え方である。ラオス(東南アジア)は前述した如く土壤に改良の余地が十分にあり、特に保水性の問題は重要であるだけに(とくに乾季における)色々の意味で土壤の改良にも役立つような牧草を導入し検討してみる事は必要な事である。

(以下次頁下段へ)